



Aviation CISM JAPAN

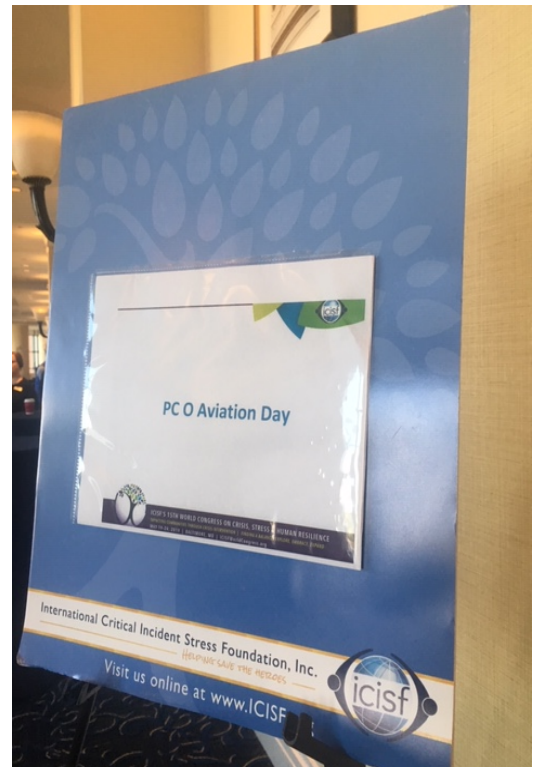
ICISF 15th World Congress2019 報告

1. ICISF 主催の World Congress

ICISF (International Critical Incident Stress Foundation) は、Maryland 大学の Dr. Mitchell を中心に惨事ストレスの軽減 (CISM = Critical Incident Stress Management) を目的としてされた国際団体で、現在は国連や赤十字の Advisory Group も務めています。この ICISF には軍関係や警察、消防、航空など様々な分野の団体が加盟しており、幅広い CISM 活動を行っています。

ICISF では World Congress を 2 年に 1 度開催しており、2019 年 5 月 19 日から 24 日までの 6 日間、米国ボルチモアで開催されました。その Congress では数多くのワークショップが開催され、そのうち ICISF に加盟している航空分野の各メンタルサポート組織の活動報告と情報共有を目的とした、「Aviation Day」が 5 月 20 日、21 日の 2 日間、開催されました。

Aviation Day における今回のテーマは、「ICISF における航空分野の設立から現在に至る 27 年間の総括と共に、今後の展望を共有する」です。今回の Aviation Day には約 60 名が参加し、米国やメキシコ、ブラジル、ドイツ、スイス等から運航乗務員や客室乗務員、管制官といった航空従事者、さらには従業員支援プログラム (EAP = Employee Assistant Program) や米国連邦航空局 (FAA) から出席がありました。日本からは、ALPA Japan/日乗連と航空安全推進連絡会議が共同出資して運営している Aviation CISM JAPAN から 3 名が参加しました。



2. Aviation Day

ワークショップの取りまとめは、元米国アロハ航空機長の Mimi Tompkins 氏と米国 FedEx 社の運航部門管理職で B777 部副部長、そして ICISF 理事を務める Pete Dillenbeck 氏により

行われました。両者は、航空業界における CISM の体制構築に初期から多大な貢献をしてきた人物です。

① Developing 「信頼 “Shinrai” : Trust」

Aviation CISM JAPAN の顧問臨床心理士である中濱慶子先生から、日本における CISM 活動の歴史や CISM 事務局の役割、教育方法、活動件数、事例紹介などに関する約 1 時間のプレゼンテーションを実施しました。その中では、日本から参加した 2 名のメンバー（航空管制官、エアライン機長）も自身の体験に基づいた事例を紹介しました。

日本における CISM 活動の大きな特色は、会社や職種毎にそれぞれチーム構成が行われる他国と異なり、会社や団体の枠を超え、運航乗務員、航空管制官、航空整備士、客室乗務員といった航空従事者がチームを構成していることです。そのため、他職種間で共に学び、情報共有を行い、そして相互にサポートし合うことが出来ます。さらにメンタルヘルスの専門家がチーム内で共に活動していることも大きなメリットとなっており、こうしたチーム構成は国際的に大きな評価を得ています。

② CISM and Beyond 「Overview of the development from European & International Side」

Lufthansa 航空の元機長で、ドイツにおいて長年に渡って Peer Support（後述）を行っている「MAYDAY Foundation」の中心メンバーである Hans Rahmannsi 氏より、欧州における CISM の潮流、そして今後の展望に関するプレゼンテーションが行われました。

2015 年に発生した German Wings 9525 便の事故を受けて、欧州では EPPSI (European Pilot Peer Support Initiative) が設立されました。具体的には各関係者に対して Peer Support Program (※) の設置をサポートし、Peer System を有効に運用できるようなガイドラインを示すなど、欧州における Peer Support について包括的な活動を行う機関です。各航空会社では 2020 年 8 月以降（2

年間の猶予期間有り）、Peer Support Program を設置することが義務づけられました。今後の法制化に対して具体的にどのように組織を構成し運用していくか、各社は模索の状態が続いています。一方で、こうした Peer Support System が航空安全対策の一環として非常に大きな役割を担っていくことが期待されています。

※Peer Support Program:

同じ職場の仲間による、仲間のためのメンタルサポートプログラム。専門家が直接メンタルサポートを実施するのではなく、その職場環境の背景を熟知し、サポートに関して特別な講習を受けた仲間が、仲間のサポートを実施することによって早期に仲間のストレスの軽減を図ることを体系化したもの



③ Expanding the service Beyond 「-Project LIFT- South West Airlines」

米国サウスウェスト航空の「Project LIFT」 Chairman である David Sanders 機長より、サウスウェスト航空におけるパイロットのための Peer Support System 「Project LIFT」に関するプレゼンテーションが行われました。「Project LIFT」は2015年にサウスウェスト航空で設立された Peer Support System であり、会社の経営陣や運航部門と協力しながら運営されています。

米国でも German Wings の事故以降、FAA の ARC (Aviation Rulemaking Committee) が発行した報告書において、各航空会社が Peer Support Program を設置することが推奨されていることから、米国国内でも今後、その重要性を増すことが予想されます。

サウスウェスト航空における「Project LIFT」は会社組織の一部として機能していますが、その運営に経営陣は関与していません。事象が発生した場合は、完全な守秘義務の下において「Project LIFT」の Peer Support メンバーが適切と思われる部署と調整を行います。

現在、米国では様々な形で Peer Support Program が提供されていますが、この「Project LIFT」は米国の航空分野における好例として、今後の成果が期待されるシステムの一つです。

④ Embracing Communication and Resiliency among Team Members」

米国サウスウェスト(SWA)航空の客室乗務員であり同社の CISM Chairperson を務める Eileen Rodriguez 氏が、同社の客室乗務員に対する Peer Support Program に関するプレゼンテーションを行いました。サウスウェスト航空では、客室部門では長年に渡って経営陣の協力の下、Peer Support Program が確立されており、事故後における対応では自殺予防を含めて大きな成果を上げてきました。

2018年4月、同社初の乗客が死亡した航空機事故が発生しました(SWA1380便、死者1名、負傷者7名)が、この時に乗務していた客室乗務員に対して、CISM Team が事故発生当初からケアを行った結果、当該客室乗務員の乗務復帰に大きな役割を果たした、との具体例が紹介されました。



3. まとめ

今回参加した World Congress では、様々な活動報告が実施されることで、自分たちの活動に参考になる情報を数多く入手することが出来ます。そんな中、この World Congress に参加することによる最も大きな成果は、各国様々な団体のメンバーと交流することにより、全世界的なネットワークを拡げることが出来ることです。2日間のプログラム終了時には、2年毎の交流

のみだけでなく様々な手段による頻繁な連絡によって、繋がりを深めていくことを相互に約束しました。

前述したように、欧州において Peer Support Program が間もなく法制化される予定であること、そして米国においても同 Program が推奨されていることから、「Peer Support Program」 「メンタルサポート」といった活動が、航空分野における安全対策の一環として今後、全世界的に大きな役割を担うことが期待されています。

Aviation CISM JAPAN としても、経験値を持った Team Member の育成や継続的な教育、そして訓練をより広範囲に実施していくことが重要であることを再認識しました。さらにこれまでの活動や組織運営に対して良好な評価を得ることが出来たこと、そして各団体と今まで以上の深い交流ができたことは大きな成果と言えます。



以上